

淡路人形芝居

復活を！

盛岡藩ゆかり

江戸時代初期、兵庫県の淡路島から盛岡藩に伝わった淡路人形による人形芝居を、淡路人形操り師の子孫である会社員鈴木茂さん(56)(滋賀県守山市)らが現代に復活させようと計画している。鈴江家に伝わる古い人形を分析し、復元させる試みも進めている。(浅川貴道)

古文書によると、鈴江家にも公演を行ったとされる。鈴江家とも淡路の人形使いだ。による淡路人形の公演記録は、1641年、盛岡藩2代藩主の南部重直に招かれて盛岡の北上川河畔に居を構え、人形芝居の「人形」とも呼ばれている。

代々伝わる人形を見つめ、盛岡での淡路人形芝居復活を考える鈴木さん(盛岡市鮎屋町の「もりおか町家物語館」で)



操り師の子孫 公演目指す

淡路人形 約500年前から、兵庫県の淡路島で演じられてきた浄瑠璃芝居の人形。江戸時代になって人形芝居の popularity が出てくると、全国に広まった。大阪で文楽座を創始した植村文楽軒も淡路出身で、淡路人形浄瑠璃は文楽のルーツとされる。芝居は国の重要無形民俗文化財に指定されており、淡路島で現在も演じられている。

人形の復元には県立大の土井章明教授(情報工学)が協力した。CTスキャンで人形の頭部を解析し、土井教授が開発した3Dプリンターでプラスチックのレプリカを製作した。頭部は目を動かすからくりがあるが、3Dプリンターにより、分解せずに内部構造も復元できた。人形を操る練習に使う予定だ。土井教授は「人形の設計図はないが、この方法で、貴重な人形を簡単に再現することができた」と話す。

鈴江家に伝わる人形は、烏帽子をかぶった男やえびすなど5体と、手にはめて使う小型の指人形が7体。作られた年代ははっきりしないが、中には一人で操る形式もあり、浄瑠璃芝居の人形が3人で操られるようになった18世紀前半よりも前に作られた可能性があるという。

日本の古民俗・芸能に詳しい盛岡大の大石泰夫教授は「人形師にとって人形は消耗品なので、古い物は捨てられてしまう。このような形態の人形が残されているのは貴重」と解説する。

鈴木さんは大学進学を機に滋賀県に移り住んだが、先祖伝来の人形を有効に使えないかと考え、人形芝居の再現を思い立った。「盛岡に貴重な文化があったことを、多くの人に伝えたい」と思いを語る。

鈴江家に伝わる淡路人形や明治期の錦絵を集めた「鮎屋町鈴江家の錦絵展」が10月13日まで、もりおか町家物語館(盛岡市鮎屋町)で開かれている。鑑賞料300円。問い合わせは物語館(019-654-2911)。

* 3Dプリンター使い復元も